

10 医史学教育の現状アンケートから

大村 敏郎

昨暮に、日本医学教育学会の医史学教育ワーキンググループの課題として、全国八〇の医学校の学長または医学部長宛にアンケートを行なった。この内容はすでに同学会の総会に報告したので、医史学教育を専門にする人々の最も密度の高いこの場で現状をお知らせするとともに、今後の対策を考えて頂きたい。

アンケートの回答率は一〇〇パーセントになり、現状を把握する良い資料になった。

意外なことに四〇校になんらかの形で医学の歴史を教えているという返事を得た。丁度半数である。質問に条件を付けて、夫々の分野の序論としての歴史は除くとしておいたが、回答の中にはその条件を満たしていないものもあり今後の第二次の調査に待ちたい。

医史学または医学史とはつきり銘打っている講義はよいが、医学概論の中に交じっていると、実際にどの位の時間が歴史に当てられているのか判断しにくい。一コマだけのところから年間を通してやっているところまである。複数学年に跨がっているものもないではない。

しっかり専門の教員を当てているところからは、時間が足らなくて十分な講義ができないと訴えがあり、そうでないところは試行錯誤で構成に苦慮している。医史学会では知られていない隠れた医史学者が医史学教育を支えてくれている場合もある。医史学会としては参考にできるようなスタンダードのカリキュラムを提示する必要があると感じられた。

一方カリキュラムのない大学は、学長または教務担当者意見で二〇校は今はカリキュラムないが、そのようなものが必要であるとの認識を持つていることを知ることができた。今もないし今後作る予定もないが二〇校で全体の丁度四分の一に相当する。つまり四分の三は医史学に視線を送っていることを医史学会でしっかり受けとめてほしい。

カリキュラムのない大学の理由を訊ねると、必要と思
っている大学はカリキュラムにゆとりがない、教員がい
ないに集中しており、まったく作る気のない大学はその
外にも複数の理由をあげている傾向にある。注目すべき
は大学の自主性が認められて最近カリキュラムが変わっ
た大学に歴史を教えるのをやめたところがいくつある
ことである。

夫々の大学が専任の医史学者を抱えるのは無理とし
ても、そう沢山のコマ数を担当するのだから地域でひ
とりが掛け持つて担当できないものだろうか。

研究を楽しむだけでなく、もっと教育への関心を持
つて頂くことはできないだろうか。それには狭い範囲の研
究でなく、大きな流れとして医学の歴史をとらえ、次の
世代の医師たちに、先人たちへの敬意と感謝を、未来へ
の責任と意欲を伝える講義をダイナミックに構成して、
わくわくするような講義を作りたいものである。

各分野の中の歴史は基礎や臨床の教授にお願いする
として、分野の垣根をこえた歴史観が医師教育に必要なこ
とを気が付かない大学首脳にどう告げたらよいのか、諸

先生のご意見を伺いたい。

以前金沢の本学会総会で「医学史教育のシンポジウム」
があったが、学会の中で論ずるに止めず、広く世に訴え
ていくことも当学会の責任と感じて、今回は何も古い資
料を掘り起こす研究を示すことなく問題を提起して、貴
重な時間を頂いた次第である。

(慶應義塾大学医史学研究室)